

魂の自由を

「特集1」鳥の劇場「天使バビロンに来たる」
「特集2」教育課題の解決に向け、学力アドバイザーに聞く



公益財団法人 福武教育文化振興財団創立25周年記念事業「犬島 海の劇場」

鳥の劇場「天使バビロンに来たる」

煙突がバベルの塔と重なる—ここでしかできない上演

鳥の劇場の演出家・中島諒人氏による日本初演「天使バビロンに来たる」を11月3日、4日に犬島アートプロジェクト「精錬所」内 近代化産業遺産 発電所跡で上演しました。東日本大震災後、現代文明が問い直されるなか、犬島から新しい社会のあり方を考えるきっかけとなるような意義のある舞台にしたいと望んだ2日間。今号は初日終演後のアフタートークで中島諒人氏に経緯や内容について語っていただきました。[聞き手：大森誠一（NPO 法人アートファーム理事長）]

—場所や作品が決まっていた経緯を教えてください。

犬島のどこかで、何かをやりませんか、とお話をいただいた。犬島は自然がすごく美しく、瀬戸内独特の穏やかさがあって、素敵な場所がたくさんある。しかし、のどかさというのは、人と人とのぶつかり合い、葛藤を描く演劇との両立は難しいところがある。一方で、日本の近代化を彷彿させる銅製錬所跡があって、両方を活かせる方法はないのだろうかと考えていた。

「天使バビロンに来たる」は、いつかやりたいと思っていた作品。このお芝居の中で、神が無からつくった美しい娘の「こんなにも地球って美しいものなの」というセリフと、象徴的に語られるバベルの塔という人間が築いた文明を思い、ちょうどこの場所にぴったりだと思った。

—1、2部は沖鼓島を借景にした東向き、3部は発電所跡の遺構を借景にした西向きの客席。観客が上演半ばで移動するという舞台転換には驚きました。

この辺でやろうとは決めていたが、どちらかを立てるとどちらかが立たない。そのなかで、客席を2つ作ればいいと思いついた。現代劇の場合、昼の野外劇の上演はやらない。照明が使えないし、どうしても外部からいるんな情報が入ってくるので、なかなか架空の空間を作りづらいというのが理由。照明を使うのであれば、舞台を2面作るのは大変だけど、逆に今回の場合は音響と客席を2面作ればどちらも使えるなど。それで、このような形でやることになった。

瀬戸内って乾いているから、ユーフラテス川に見えなくもない。そびえ立つ煙突がまさにバベルの塔と重なる。両方が成立して、ここでしかできない上演になってよかったと思っている。

—古代の文明都市バビロンが舞台ということで、さぞかし現実離れたストーリーかと想像していましたが、逆に現代と古代が似通っている気がしました。

1950年代にスイスの劇作家フリードリッヒ・デュレンマットによって書かれたテキストで、基本的には、文明批評という感覚がある。王様というものは、独裁者で、軍事力があって世界を支配していくものだけれども、一方で王様が悪いとは言えない。彼は世界を混沌から秩序にむけて、不完全なものから完成したものへと導こうと

する。まさしく私たちの社会はそうやって成長してきた。その恩恵を私たちは被って生きている。

けれども一方で文明あるいは制度は、人間を抑圧するところがある。その対極に乞食アッキがいて自由に生きている。自由だけで生きていけるかということ、何十億人という人間が自由だけでは当然生きていけないわけで、そうすると、自由は大切だけど一方でなんらかの統治あるいは文明、何かを築きあげていくことも必要となってくる。

今私たちは、人間が一人で生れてきて自由に生きていくという本来の姿と、文明や経済のシステム、法律などとの関係の中で生きていくことをあらためて問い直さないといけない。その2つのぶつかり合いが描かれていることが、このテキストの面白いところではないかと思う。

重いテーマだけど、デュレンマットの場合は、論理を突き詰めた人間のぶつかり合いが、グロテスクでありつつ、結果としてたまらなくコミカルになる。シリアスなだけどもんだか笑っちゃうところが多分にありますよね。その辺を楽しみながら観られるところが、デュレンマットの魅力なのかなと思う。

—大衆を表す崩れかけたパペットには、中島さんのある種のアイロニーが込められているような…

デュレンマットのテキストでは、常に大衆というのが重要な役割を果たします。有象無象の人たちがでてきて、欲望を丸出し、我儘で移り気で、でもそれが可愛らしくもあり。

ヨーロッパなどの劇場では、雇用された役者がたくさんいるので群衆シーンが可能なんですね。けれど現実的に我々の状況では無理なので、新聞で作って、ぐしゃぐしゃな存在で、人間でそういう見方も捉え方もできるねというところで、私たち自身もそういうものだよねと。

—最後に鳥の劇場について、どういう空間なのか、場所なのか、なぜそこで芝居を作られているのかを聞かせてください。

日本だと貸しホールはあっても、劇場は少ないという現状がある。貸しホールっていうのは、言わば大きなカラオケボックスみたいなもので、誰でも使えるという場



所。レンタルスペースではあっても作る場所にはならない。ヨーロッパの劇場の場合は、専門家がいてお芝居を作る場所になっている。そこで作られたものが社会的資産として多くの人に共有されている。そういうことをやりたいなと夢想していた。

2006年から鳥取でNPOとして、廃校になった小学校の体育館を自分たちで借りて、地元のご理解を得て、そこを占有させていただき、活動をしている。お芝居を作り、このように県外や海外に出かけて行って作品を観ていただくこととか、国際演劇祭という形で海外から作品を招へいすることをやりながら、単純に演劇が好きだっていう人だけのためだけではなくて、演劇を使って、より広く社会的に劇場とは存在価値があるなということを、私たちなりの、鳥取なりの、人口最少県の、中山間地モデルとして劇場にできることは何かを探そうとしている。

日本は1990年代以降から、世田谷パブリックシアターなどを中心に公共劇場という流れが始まった。それは、西洋の劇場モデルを輸入する…基本的には真似する形であった。でも今はですね、お芝居の中でも語っ



中島諒人 ——— Makoto Nakashima

演出家、鳥の劇場芸術監督、「鳥の演劇祭」プログラム・ディレクター。1966年生まれ。90年東京大学法学部卒業。大学在学中より演劇活動を開始、卒業後東京を拠点に劇団を主宰。2004年から1年半、静岡県舞台芸術センターに所属。2006年より鳥取で廃校を劇場に変え、「鳥の劇場」をスタート。二千年以上の歴史を持つ文化装置＝演劇の本来の力を社会に示し、演劇の深い価値が広く認識されることを目指す。芸術的価値の追求と普及活動を両輪に、地域振興と教育分野にも関わる。

ていたとおり、文明のバベルの塔は崩壊しかかっている。「バビロンはバベルの塔とともに崩壊する」というセリフがあるのですが、「東京は東京スカイツリーとともに崩壊する」という感じだと僕は思っているんですけど。

日本全体が文明的には危機の状況の中で…例えば、乞食アッキは人間が本来持っている自由のうえて生きたいと思っている。それを芸術家と一言で言ってしまうと狭くなってしまいます。

私たちは、基本的に誰に束縛されることなく自由に生きたいと思っている。人間的な価値、魂の自由を発見し、その魂の自由を喜べる場としての劇場を創ることが、今の閉塞している日本の状況のなかで意味があることではないかなと思いつつ、少しずつ活動しているところです。

「天使バビロンに来たる」

作・フリードリッヒ・デュレンマット

古代バビロニアを舞台に神や自然の摂理に抗して巨大な塔を建てようとする王と、権力や制度から自由に生きようとする貧民を対照的に描いた戯曲

Photo by ; Daisuke Aochi

学力向上アドバイザー会議を開催

全国学力・学習状況調査における岡山県の順位は近年低迷していますが、今年4月に行われた調査では小学校45番、中学校42番とさらに厳しい結果となっています。

福武教育文化振興財団は、昭和62年に財団設立以来、岡山県の教育振興発展を願って様々な教育助成事業を行ってきましたが、こうした結果を踏まえ岡山県の教育課題の解決により効果的な助成となるよう、今後の事業のあり方を見直すこととしました。

そこで、教育専門家、民間、報道関係者の方々に「学力向上アドバイザー」をお願いし、今後の教育助成事業のあり方、財団が行う学力向上策についてご意見・ご提案をいただきましたので概要を紹介します。



西島委員

- 学校経営レベルで、あるいは地域を巻き込んだ形での学力向上へのアピールに対して財団としてバックアップすべき。
- 全国学力・学習状況調査の結果を伸ばすのであれば、広く県全体としてアピールしたり、効果が期待できる学校に集中して資金を投下するなどが必要ではないか。



小山委員

- 学力向上には、学校単位での取り組みから地域的な広がりとなり、更には県民運動のような盛り上がりがある取り組みに助成することが望ましい。
- 優れた成果を上げた所は長期的な助成を行い、その実践を広く発信することが大切。
- 行政が取り組みにくい部分について財団の独自色を出して取り組むこと。

- 【学力向上アドバイザーをお願いした方々】
- 倉敷芸術科学大学大学院教授 小山悦司氏
 - 環太平洋大学次世代教育学部教授 村上尚徳氏
 - 岡山商工会議所理事・企画振興部長 畠平泰彦氏
 - 山陽新聞社論説委員 影山美幸氏
 - ベネッセコーポレーション小中学校事業部部長 西島一博氏

教育課題の解決に向け、
学力向上アドバイザーに聞く

「優れた活動内容をモデルに」



学力向上の取り組みは、学校や教員だけでなく地域が積極的に関わり主体となって盛り上げ、継続性がある活動を目指すこと、良い実践活動は積極的に情報発信することが必要との意見で一致しました。

平成 25 年度の教育研究助成は、学力向上を図る研究実践とグローバル意識を持つ子どもの育成に特化するとともに、市町村教育委員会に対しては、学力向上事業モデル地区に集中的に助成することを検討しています。

「情報発信することが大切」



影山委員

- 学力向上には地域という観点が重要。熱心な教員グループの活動だけでは地域に広まらない。助成の成果を多くの学校や地域に広げるための情報発信が必要。
- 教育助成は、助成が終了した後も継続できるように仕組みづくりが必要。
- 子供たちに点数を取らせるのではなく、学ぶ楽しさが高まるようなものになりたい。

村上委員



- 学力向上の取り組みは、授業の質の向上と併せて、学習と遊びのバランスが大切。学校に頼るのではなく、家庭や地域の人々が主体となって子どもたちのよい生活習慣環境を作ることが望ましい。
- 財団は優れた活動内容をモデルとして運営の仕組み等一般化できる部分を選び出して情報発信することが大切。

畠平委員



- 教員や地域の人々が公共の事柄に関心を持ち、子どもの知的好奇心を高めることが結果として学力向上につながる。大分県豊後高田市では、地域づくりの成功が学力向上の効果をもたらしたのではないか。
- 例えば子どもたちに岡山の特徴として論語のような精神的支柱を教え共有することが、よい環境づくりを可能にするのではないか。

IFプランの仮説を元に、 柏島小学校独自の取り組みを行った3年間

倉敷市立柏島小学校 校長 藤澤信義

11月22日に開催した「学校力向上」研究発表会では、県内外から300人を超える参加者があった。「教えて考えさせる授業」の全国的な注目度の高さを感じる。学力、学校力の向上を目指して、研究主題「家庭・学校・地域が協働して『人間力』をはぐくむ学校の創造～「教えて考えさせる授業」の実践と学校支援ボランティアの活用～」を掲げて3年間、IFプランの仮説を元に、柏島小学校独自の取り組みを行った。主な取り組みは次の3つである。

- ① 発達段階に応じた、めあてにつながる予習方法の指導
- ② 学習方略や学習観の定着を図るため、「学び方5」の設定と授業や家庭への取り入れ
※「学び方5」とは、間違いから学ぶ、説明をしてみる、一言コメントを書く、図や絵に描いて考える、キーワードを見つけるという5つの手法をもって行う学習法
- ③ 学習相談と「放課後学習サポート教室」の実施

その結果、算数科における学力については、全国学力状況調査では、全国平均を上回り、3年生以上で実施してきたベネッセ総合学力調査でも、各学年ともに上昇傾向にある。また、学校力の向上についても学校評価アンケート調査では、経営力、スクールアイデンティティ、学力、指導力、安全・危機管理の5項目について、本校はバランスのとれた学校力を持っていることが明らかになった。

卒業時を見据えて子ども像を描き、担任が替わっても一貫した指導を行う柏島小学校6年間の学びをつくることを目標に、共通理解を図りながら日々の取り組みを大切にしてきた成果であると考えている。今後も、学力のさらなる向上、授業や家庭学習でのメタ認知の育成、他教科への広がりといった課題の解決に向けて取り組んでいきたい。

「学校力向上」研究発表会の学力指導案集・研究紀要につきましては、倉敷市立柏島小学校HPでご覧いただけます。

<http://www.kurashiki-oky.ed.jp/school/kashiwajima-e/index.html>

IFプラン

東京大学大学院教育学研究科・市川伸一教授が提唱する「6つのIF、もしこうすればこのような結果が得られるであろうというプラン」を実行することによって、学校と地域が一緒になって子どもたちの豊かな学力と人間力を育成しようとする取り組み。



瀬戸内国際芸術祭2013に向けて動き出す、 岡山側の玄関口・宇野港



いよいよ「瀬戸内国際芸術祭2013」が3月20日春分の日からスタートします。岡山側から島への玄関口となる宇野港周辺は、情報が集まる拠点を目指し、人が集まるカフェなどのプラトホームを設置し島々への旅を盛り上げる場所となります。それを受けて、玉野市では、行政と民間の約60団体が連携して「瀬戸内国際芸術祭たまの☆おもてなし推進委員会」を7月に設立。市役所職員を中心に結成したボランティアサークル「たまの☆おもてなし隊」は、宇野港周辺の賑わいづくりや滞在・回遊の促進などに取り組み、来場者に対するおもてなしを行います。

たまの☆おもてなし隊 廣畑一夫さん（玉野市産業振興部商工観光課）

玉野市は、前回(2010年)の芸術祭において、オブザーバーとして参加し、本州(岡山)側から会場となる島への玄関口としての役割を果たしましたが、期待された市街地及び市内観光地への周遊効果はなく、通りすがりの街となってしまいました。それを踏まえ、本市では、昨年3月に国の認定を受けた「玉野市中心市街地活性化基本計画」に掲げた、「アートで回遊できるまち」を目指し、今回は、宇野港周辺が正式な会場となり、かなり賑やかで大掛かりな、アートサイトを展開していきます。そうした中、最近では、市内への若手クリエイターの移住も増えてきており、地域で暮らす人々との交流の機会も増え、少しずつ街の活力がアップしてきているように感じています。そして、その中心市街地活性化事業の核でもある温浴施設「瀬戸内温泉 たまの湯」もこの春にはオープンすることから、芸術祭との相乗効果で、宇野港周辺の賑わいと活性化が期待されており、地域で暮らすみんなで、この芸術祭を盛り上げていきたいと思っています。

たまの☆おもてなし隊 福原奈々さん（もめん畑・コットンショップ）

宇野は今、渦中にあると感じています。宇高国道フェリーの運休、シャッターを閉ざした商店街…寂しい話題も聞こえてきますが、移住者支援プロジェクトや芸術イベントなど、この街を愛する人々の活動も確かに浸透しています。そんな中、この度の瀬戸内国際芸術祭への参加は、より多くの方に宇野を知っていただける大きなチャンス。芸術の素晴らしさはもちろん、宇野という土地や人の魅力を感じていただける機会にしたいです。そのためには、地元住民が「他人事」ではなく「自分事」として芸術祭を楽しむことが大切。展示会場の選定など様々な交渉が始まっていますが、地元の方がワクワクと心躍る感覚を持てるような、橋渡し役を果たしたいです。一過性の賑わいではなく、芸術祭後も人の波を継続できるよう、「人」の力を活かしていきたいと思っています。

瀬戸内国際芸術祭2013

Setouchi Triennale 2013

春:3月20日|春分の日|4月21日|日|

夏:7月20日|土|9月1日|日|

秋:10月5日|土|11月4日|月|

<http://setouchi-artfest.jp>

会期総計 | 108日間

2010年開催エリア | 高松港周辺、直島、豊島、女木島、男木島、小豆島、大島、犬島、宇野港周辺

新規参加エリア | 中西讃の島々(沙弥島[春]・本島[秋]・高見島[秋]・粟島[秋]・伊吹島[夏])



青地大輔

発電所跡。この場所に私が足を運んだのは何年ぶりのことだろうか。私が初めて犬島に来て最初に訪れたのは、この発電所跡がある銅製錬所跡地であった。草木に飲み込まれ自然と一体化したその姿は、何世紀も前の遺跡のように感じられ、アンコールワットやバベルの塔のような印象を受けたことを覚えている。今回の劇場は、この発電所跡をバベルの塔、そして向かいの海をユーフラテス川としてバビロンの都を表現しており、私が初めて発電所跡を訪れた時の印象と近いものがあった。そして、王と乞食の姿を通して「豊かさ」と「自由」とは何かを考えさせられるものであった。

「豊かさ」は、個人の置かれている状況によってまったく異なるものだ。また、「自由」というものは不自由という選択の上にある規律により存在するものだ。

近年、犬島を訪れる人々は急速に増えているが、決して観光地ではない。人々が暮らす生活の場なのである。来島者は、アートを楽しむと同時に島の風景やそこにある古いものなどを自由に散策して楽しんでいるようだが、モラルを問われる場面を少なからず見かけることがある。どのような場面でもそうなのだが、最低限必要なのは「モラル＝マナー」という規律なのではないだろうか。それが存在してこそそこに「楽しい」という感覚が生まれ、本当の「豊かさ」というものが見つかるのではないかと私は思う。コミュニケーションというものが問われる今、各々で一度考えてみてはどうだろうか……。

あおちだいすけ／写真家、ブルーワークス PHOTO & DESIGN Office代表、犬島時間実行委員会代表。1973年岡山市生まれ。写真及びデザイン業を営むとともに2004年よりアートを通じ、コミュニケーションを図ることを目的としたプロジェクト「犬島時間」を企画主催。人材の育成と発掘・地域づくりに取り組む。

Editor's Comments

創立25周年記念事業「犬島 海の劇場」は、昨年11月開催の『天使バビロンに来たる』をもってすべて終了いたしました。犬島に足を運んでいただいた皆さま、多くの関心を寄せていただいた皆さまに厚く御礼を申し上げます。

記念事業は“犬島を演劇の島に”という福武理事長の指令をもとに、2011年から2年間にわたって取り組み、初年度は犬島を大阪に次ぐ拠点とする維新派の『風景画』をはじめ、新進気鋭の演出家・村川拓也氏による移動演劇宮本常一への旅『地球4周分の歌』を公演。2年目は瀬戸内市牛窓出身で劇作家・坂手洋二氏の作・演出による『内海のくじら』、鳥取に本拠を置く鳥の劇場の『天使バビロンに来たる』の2本の野外劇のほか、欧州を拠点に活躍するダンサー 4人による『犬島ダンス掌編集・たまゆら』と、犬島全土を舞台に実験的とも言える大胆な作品を高覧に供し好評をいただきました。また未来を担う子どもたちを対象とする事業にも取り組み、初年度は平田オリザ氏を塾長に4人の舞台芸術家が小中高校で派遣授業をする『舞台芸術と地域の交流塾』。2年目は小規模校に焦点を当て、演劇とダンスのプロの芸術家が2校の交流授業を行う『学校でひらく舞台芸術教室』など犬島と関わる多彩な事業を展開いたしました。

ことしは第2回『瀬戸内国際芸術祭』の開催年。公益財団として新スタートを切った当財団も全面協力、已年に相応しく脱皮して更なる成長を目指す覚悟です。(S)

季刊

不易

F U E K I vol.49 2013.2.5

編集・発行：

公益財団法人 福武教育文化振興財団

〒700-0807 岡山市北区南方3-7-17
株式会社ベネッセコーポレーション本社3FTEL 086-221-5254 FAX 086-232-3190
URL <http://www.fukutake.or.jp/>
E-mail eczaidan@fukutake.or.jp制作：
株式会社 吉備人
デザイン：
田中雄一郎(QUA DESIGN style)
印刷：
広和印刷株式会社FUKUTAKE
EDUCATION AND CULTURE
FOUNDATION

人づくり、地域づくりを応援します

公益財団法人 福武教育文化振興財団